可哀相な姉

渡辺温

1

すたれた場末の、たった一間しかない狭い家に、私と姉とは住んでいた。ほかに誰もいなかった。私は姉と二人きりで、何年か前に、青い穏やかな海峡を渡って、この街へ来たのであった。

そして姉が働いて私を育ててくれた。

姉は、断っておくが、ほんとうの私の姉ではない。姉の母は、私の従姉である。私の父は姪に姉を生ませた。しかも姉は生まれ落ちてみると唖娘であった。

だが、もう私達の父も、姉の母も、私の母もみんな

死んでしまって、今はふるさとの海辺の丘に並んだ白い石であった。

唖娘の姉と二人で久しい間暮していて、私達と往来する人はこの街に一人もいなかったし、私は一日中つんぼのように、誰の声をも聞かなかった。

姉がどんなに私をいつくしんでくれたか！ 姉は毎晩々々夜更けてから、血の気のない程に蒼ざめて帰って来、私にご飯を食べさせてくれた。

姉はまた、私を抱いて寝てくれもした。私は、魚のように冷めたい姉の手足が厭であったけれども、それでもすなおな私は、姉の愛情にほだされて、何時でも

涓ぐんで、姉の体を温めてやった。

その中に姉は悪い病気に罹った。胸の悪くなるような匂が、姉の体から発散した。姉は、私にその病気が伝染するのを恐れて、もう一緒に寝るのは止してしまった。

私は淋しく一人で寝た。そして一人で寝ている中に、何時の間にか大きい大人になった。

2

到頭、或る日姉は私が本当の大人になってしまった

ことを覚った。

遊び友達のない私は、家の裏の木に登って、遠くの雲の中に聳え重なっている街を見ていた。すると姉は私の足をひっぱって、私を木から下ろしてしまった。

姉は私のはいている小さな半ズボンをたくし上げた。姉はさて悲しい顔をして首を縦に振ってうなずいた。姉が首を縦に振ってうなずく場合には、我々普通の人間が首を横に振って、いやいや、いやいやを、するのと同じ意味なのであった。彼女の愚な父と母とは、ひょっと誤って、幼い彼女にそんなアベコベを教えてしまったのだ。不具者のもちまえで、彼女は頑に、親の教えた

過ちを信じて改めなかった。
姉は幾度も私の脛を撫ぜて、幾度も首を縦に振った。
――姉さん。どうしたの？」と私は訊ねた。
姉は長い間に、私と姉との仲だけに通じるように
なった。精巧な手真似で答えた。
――ワタクシ、オマエガ、キライダ！」
――なぜです？」
――オマエハ、モウ、ソレヨリ、オオキクナッテハ、
イケマセンヨ。」
――なぜです？」
――ワクシハ、オマエト、イッショニ、クラスコト

ガ、デキナクナルモノ。」

——なぜです？」

姉は私の硯箱を持って来た。私は眼に一丁字もない彼女が何をするのかと、訝（あや）しんだ。ところが姉は筆に墨をふくめて、いきなり私の顔へ、大きな眼鏡と髯とをかいた。それから私を鏡の前へつれて行った。

——立派な紳士ですね。」と私は鏡の中を見て云った。

——

——ゴラン！ソノ、イヤラシイ、オトコハ、オマエダヨ。」

姉は怯えた眼をして首を縦に振った。

私は姉をかき抱いて泪ながらに、そのザラザラな粗悪な白壁のような頬へ接吻した。姉は私の胸の中で、身もだえして唸った。

3

姉は、夜更けてから、血の気の失せた顔をして帰って来て、私にご飯をたべさせてくれた。

どんなに、姉は、私を愛しんでくれることであろうか！

姉は腕に太い針で注射をした。――姉の病気は此頃

ではもう体の芯まで食いやぶっていた。

姉はそして昼間中寝てばかりいた。姉は眠っている時に泣いた。泪が落ちくぼんだ眼の凹みから溢れて流れた。

私は真昼の太陽の射し込む窓の硝子戸に凭りかかって、半ズボンと靴下との間に生えている脛毛を、ながめてばかりいた。

(――私は、姉を食べて大きくなったようなものだ。)

私の心は、そんなにひどい苦労をして、私を大人に育て上げてくれた姉に対する感謝の念で責められた。

私にとって、姉の見るかげもなく壊れてしまった姿は、

黒い大きな悲しみのみだった。私はなぜ、私が大人になるためには、それ程の大きな悲しみが伴われなければならなかったのだろうか、と神様に訊き度かった。……大人になったことも、姉を不仕合せにしたことも、私の意志では決してないのだ。親父と二人の阿母（おふくろ）とに、地獄の呪いあれ！……私は堪え難い悲嘆にすっかりおしつぶされてしまって、あげくの果に、声をしのんで嗚咽するのであった、私は寧ろ死んでしまいたかった。

　私は一人でじっとしていることがやり切れなくなって、そこで姉を揺り起こした。

　——姉さん、ごらんなさい。あの雲の中にそびえて

いる大きな建築を。」
私は窓を開け放して、姉に遥かの町の景色を見せてやるのであった。
——僕は、いまに、あれよりももっと立派な大建築をこしらえて、姉さんを住まわしてあげますよ。」
すると姉は首を上下にうなずかせながら、手真似をして答えた。
——バカヤロウ、アレハ、カンゴクジャナイカ！」
——ちがいますよ！」と私はびっくりして答えた。
——オマエハ、バカダカラ、シラナイノダ。ワタシハ、オオキイウチハ、ミンナキライダヨ。」

——では、みんな壊してしまいましょう。」と私は昂然として云った。

——アンナ、オオキイウチガ、オマエニ、コワセルモノカ、ウソツキ！」

——ダイナマイトで壊します。」

——ソレハ、ナンノコト？」

——薬です……」

私は、黒い本を開いて読み上げた。

「ニトログリセリン　〇・四〇

硝石　〇・一〇

硫黄　〇・二五

粉末ダイアモンド　○・二五

――ワタシハ、ソノクスリヲ、ノンデ、シニタイト、オモウ……」

4

夕方になると、夕風の吹いている街路へ、姉は唇と頬とを真赤に染めて、草花の空籠を風呂敷に包んで、病み衰えた身を引きずって出かけた。

私は窓から、甃石道を遠ざかって行く姉の幽霊のように哀れな後姿を、角を曲ってしまう迄見送った。

たそがれの空は、古びた絵のように重々しく静かに、並木の上に横（よこたわ）っていた。

私は、急に胸を轟かして、並木の黒い蔭を一本一本眺め渡した。私はすぐに派手な、紅い短い上衣を着た若い女の姿を見つけ出した。彼女は、毎晩、そうして男を待っているのである。待つが程なく男はやって来る。男は黒いマントを長く着て、黒い大きな眼鏡をかけ、そして黒い見事な髭をはやしていた。私は軍人の父が形見に残していった望遠鏡で男と女との媾曳を覗いた。その事は私に、今迄ついぞ経験したこともない、不思議なる悦びを感じさせた。私は毎晩々々のぞいた。

その紅い上衣の女は、しばしば街の飾窓や雑誌などの写真で見覚えの或る名高い女優らしかった。男は、私が覗く度毎にドキンとさせられる程、いつか姉が私の顔へ眼鏡と髭とを悪戯書したその時の私の人相と、まるでそっくりなのである。

私はそこで顔ばかりでなく、心迄がその男と共通のものを持っていたと見えて、その恋人である女優へ、まことにやみがたい恋慕の情を抱きはじめるに至ったのである。

私は姉の眼をぬすんで、ひそかに黒い眼鏡と、黒いつけ髭とを買いととのえた。

そして或る晩私は遂に、その男よりたった一足先廻りをして彼女と会った。

私は毎晩、その男のすべての動作をよく研究して会得していた。私は口笛を軽く吹きながらステッキを振って、ゆっくりと大胆に近づいて行った。女は、そんなに巧みに変装した私にどうして気がつく筈があろう。果して、、彼女は並木の木蔭からいそいそ走り出ると、ニッコリ笑いかけて、優雅な身振りで可愛らしい両手をさしのべた。私は、恥しさと、嬉しさと不安とでぶるぶる慄えた。

目近くに見た彼女は何と云う美しい女であろう！

私は彼女のエメロオドのような瞳に、またもぎ立ての果物のような頬に、また紅い花模様の上衣の下にふくらんだ胸に、私の命を捨てても惜しくはなかった。

私は勇気をふるって、鳶色の木下闇（このしたやみ）で彼女を抱き寄せた。

——いけないわ。」

彼女は危く私のつけ髭の上へ唇を外らした。

——ニセ者！」と彼女は私を叱った。

私は、失敗った、と思った。

——未だ、つけ髭なんかでごまかしているのね。なぜ、ほんものの髭を生やさないの？」

——姉が、ゆるさないものですから……」と私はどもった。

——姉さんなんか、捨てておしまいなさいよ。」

——あなたは、僕の哀れな姉を、御存知ですか？」

——ほんものの髭が生える迄は、あたしお会い出来ませんわ。」

——どうぞ！」と私は喘いだ。

——いや！」

彼女は強か私を振りもぎって立ち去りかけたが、ちょっと足をとめてふり返って、——もしも、髭がほんとに生えたならば、あなたの窓へ、汽車のシグナル

みたいな赤い電気をつけてちょうだい。」と云った。
そしてまたすたすたと、連なる並木の蔭へ吸い込まれて行った。
私は茫然と立ちつくすのみであった。
——男は髭を生やさなければ、ほんとうの値打が現われないものであろうか？」
だが、その次にふと私は、頭の中に今頃は何処かの四辻に立って、草花を売っているに違いない、姉のしなびた醜い顔を思い浮かべて、またしても泪に暮れた。
——可哀相な姉よ！

——姉さん、どうしたのです?」

姉は、さも憎々しげに私を睨みつけながらうなずいていた。

——オマエ、ヒゲヲ、ハヤス、ツモリカエ?」

——だって、僕はもう大人になったのですから生やしたいのです。」

——オトナハ、ワタシ、キライダ!」

——そんなことを云ったって、無理ですよ。僕は大人になって、姉さんを広い家に住まわせて、仕合せに

して上げようと思うのです。」
――イイヨ。カッテニ、スルガイイ。ワタシハ、アノクスリヲノムカラ！」
――薬ですって？」
姉は首を横に振って、机の上の黒い本を開いて見せた。
――ダイナマイトは、また、食べることも出来ます。」
私は姉のザラザラな粗悪な壁土のような頬に接吻した。
私はそして、姉の見ている前で、剃刀を研いで、うっすらと生えかかって来た髭を剃り落としてしまったの

だ。

だが、——またその翌日の夕方になると、私は姉の後姿を窓から見送って、それからさて、れいの並木の方を眺め渡すのであったが、女はその言葉通りあの夜以来とんと姿を現わさなかった。男の姿も——あの男は、あの夜五分遅れてやって来て、彼女に思いがけない私という新しい恋人の出来たことを見てしまったのでもあろうか、とにかく再び姿を見せなかった。

並木の上に月が出ても、甃石へうつる影は並木ばかりであった。

私は窓の縁に、深い溜息をついて、もう決して髭を

剃るまいと心に誓った。

6

私の髭は日ましに青草のように勢いよく延び初めた。今朝目をさまして見ると、もう殆どつけ髭にも劣らない位立派に生え揃っていた。

姉は勿論、怒って、泣いた。けれども私は、固い決心をもって姉のたあいもない我儘に抗った。

——髭を生やすことがなぜいけないのか？

私は、毀れてしまった操り人形のように、あわれに

も精も根も尽き果てた様子で、明るい真昼間の日ざしの中で眠りこけている姉の寝姿を見ていると、自分もつい悲しくなるのだが、しかし私は姉をそんなに不幸にしてしまったとしても、それはあくまで自分の罪でないことを、自分の胸に幾度も云いふくめた。……私は、姉の体を食べても大きくなる事が必要だったのだ。して見れば今になって、唖娘の気紛れな感傷のために、大人になることを妨げられなければならない理由は何処にもない筈だ。……人生の曙に立って、私に価値あるものは、哀れな片輪者の泪ではなくして、立派な髭と、そしてあの美しい娘の恋だけである！　と。

――自分は先ず自由な一本立ちの生活をしなくてはならない、と私は思い立った。

併し、その前に私は、姉の正体を、姉が一体果して、尋常な路傍の草花売りであるか否かをたしかめたかった。この頃になって気がついた事だが、姉の草花を入れる小さな籠に一輪の花はおろか枯れ葉や花の匂も、ただの一度だって、そこに花などその入っていたらしい形跡をみとめ得たためしはなかった。それにそんな籠一杯の花の数が、私達二人の生活を支えるのには、あまりに少なすぎることをも理解するようになったし、私は姉の商売をしているところを見届ける必要がある

と切実に感じた。
暮方近くになって、姉が眼をさました時に私は姉にたずねた。
——姉さんは、何処で商売するのですか？」
姉は、明かにギクリとしたらしかったが、つとめて平静を装って、窓から遙かの夕焼雲の下にそびえ重さなる街をゆびさした。
——アノ、ニギヤカナ、マチデサ。」
——ほんとですか。姉さんの花を売るところを僕に見せて下さい。」
姉は、すると、いよいようろたえた様子であった。

――バカ！　オマエハ、ウチデ、オトナシク、ルスバンヲシテイレバ、ソレデ、イイノダヨ。」

――僕は、いつかしら、屹度姉さんに知れないように、跡をつけて行ってしまいますよ。」と私は云った。

姉は顔色を変えて唸った。そして劇しく、上下に首をふって、泣きじゃくった。

7

哀れな姉は、それでもいつもの時間が来ると、唇と頬とに紅を塗って、草花の空籠を風呂敷に包んで、夕

風の吹いている街路へ出て行った。

　私はそれを窓から見送っていた。姉は私を疑って、幾度も幾度も振り返りながら、甃石道を遠ざかって行った。

　姉の姿が程近い街角を曲り切ってしまうと、私はすぐさまマントを取り上げて、姉の跡を追った。並木の路を一散に走って行ったので、そこの街角を注意深く曲って眺めた時、私はそんなに骨を折る程でもなく、姉の一きわ目立ってみじめな痩せた肩をば、見出すことが出来た。私はマントをすっぽり頭からかぶって、見えつ隠れつ、姉を尾行した。電車道に沿ったり、坂

を上ってまた下りたり、裏町のうす暗がりを抜けたりして、長い長い道のりを姉は小刻みな足どりで歩いて行った。そして遂に、私達の家の窓から雲にそびえて見える、あの宏大な建物ばかりが、押し合い、重なり合って並んでいる繁華な町へ出た。色とりどりの美しいイルミネエションの中に陽気な広告の楽隊が鳴り響いていた。私はそんな賑かな街区へ足を踏み入れたのは、全くこれが初めてであったけれども、私はひたすら姉を見失うことをおそれて、高貴なる香水の匂にみちた人波を、押し分け押し分けして、姉を追いかけた。追いかけながら、私はこれ程繁昌な巷に立って見窶（みすぼら）し

い唖娘の姉が、取るに足らない草花なぞを売って、果してそれを気にとめて買ってくれる人が少しでもいるのであろうか——これは、いよいよ姉は私を欺いているらしいと考えるのであった。

姉はやがて宏大なるビイルディングの一つをえらんで、些の躊躇なく這入って行った。そのビイルディングの軒端には「フラワー・ハウス」と云う電飾文字が明滅していた。それで私も黒いマントを脱いで大胆にその玄関へ踏み込んだ。金モールのいかめしい制服を着た門番も、その他の誰も、私を怪しむ様子はなかった。

姉はやはり私に気がつかないまま地下室の方へ降りて行った。階上の立派さに引き更え、地下室の廊下は、灰色の汚れた壁の間に挾まれて息苦しい程細く、そして低い天井に灯っている電燈はおそろしく薄暗かった。姉はその廊下の両側に幾つとなく並んだ木の扉の一つを開けて、その内側へ消えてしまった。洒落た身装の男達が退屈そうに廊下を往ったり来たりしながら、時々それらの扉の前に佇んだ。私は暫くためらった後に、リノリウムの上に足音を忍ばせて、マントをかぶってそっと姉の隠れた部屋へ近寄って見た。

木の扉に、いつか私が姉に頼まれて書いてやった覚

えのある値段書が、もう色褪せて貼られてあった。

室咲名花

ダリヤ……………五十銭

シクラメン…………五十銭

菊…………………時価

そしてそれより少し上の、恰度私の眼の高さ位のあたりに手首の這入る程の円い穴があけてあって部屋の中を覗けるように出来ていた。私はそこから恐る恐る

覗いて見た。部屋の中にはうす桃色の灯がともされて、その下にたった一つ粗末な木造の寝台があって、それへ姉が一人で腰かけていた。何時の間に着替えたのか、姉は肩のピンと糊でつっ張った紫と白との疎(あら)い棒縞の衣裳を着ていた。姉の紅で濃く染めた顔はたえ難く愁しく私の心臓をひき裂いてしまった。

——どうです、綺麗な花ですか？」

にやけた山高帽をかぶった不良少年が、私の肩を敲いて通り過ぎた、私は我を忘れて、コツコツと扉を打った。

　姉は耳敏くそれを聞きつけると、私の覗いている扉

の穴へ向ってニッと笑って見せた。私は周章て、廊下の端(はず)れまで走って、そこのうすくらがりの中へうずくまった。

姉は扉をあけて首をさしのべた。それから玄関へ上る階段のところまで行ってみたが、彼女のお客の姿は何処にも見当らなかったので、落瞻(がっかり)したらしい様子で肩をすぼめて部屋の中へ引き込んで行った。私はそこで再び取って返すともう一度丸穴から覗き込みながらコツコツと扉を敲いた。

姉はやはりいそいそと身を起した。

私は前の時のように廊下の隅っこで、姉の出て来る

のを待った。姉は扉から首を出して見て、それからまた階段の方へ歩いて行った。私はその隙に素早く部屋の中へ飛び込んで、寝台の下へもぐった。

二度も誑かされた姉は、溜息を吐きながら戻って来た。私の眼の前に姉の瘦せ細った脚がぶら下った。私はあらん限りの勇気を奮い起して、泣きたい心を抑えつけた。

——コツコツ、コツコツ」と扉が鳴った。

姉は懲りもしないで、直ぐに立って行って扉をあけた。

だが、今度は本当にお客様であった。その花を買う

お客は頭も顔もつるつる光った肥っちょの紳士であった。紳士は物をも云わずに姉を抱き寄せた。……紳士がどんな見るに堪えない侮辱を姉に加えたか、私は語りたくない。

私はとにかく、突然寝台の下から躍り出してその紳士を襲った。私は紳士の背部深く短刀を突き刺した。……哀れな姉は、紳士の胸の中で気を失って、一緒に床の上に倒れた。

私は短刀を姉の手に握らせた。

それから、私は血に塗みれた手を洗面台ですっかり洗い落として、さて落ちつき払ってその部屋を立ち出

でた。

8

私はたえてない楽しい気持で家路を辿った。何んと云う思いがけない幸福が向いて来たものであろう！

私の勇気は、あらゆる人生の不幸をうち亡ぼしてしまったではないか。

おそらく姉は、今頃は警察の手に抑えられて、そして

――この十万長者を殺したのはお前であろう。ウムよろしい金が欲しさに殺したと云うのだな。」と云う署長の厳しい問に対して、彼女は何度でも首を縦に振って、狂気のようにうなずいていることであろう。

もう、今夜からは夜更けて姉が帰って来る憂いはない。

可哀相な姉よ！

だが、私は髭もすでに立派に生えたし、これからは誰に憚るところもなく、一人前の大人として世を渡って行くことが出来るのだ。

私は途中で、汽車のシグナルのような赤いランプを一つお土産に買った。

その赤いランプを、今は唯一の主人である我家の窓へとりつけて、私の美しい恋人を呼びとめてやるためであることは云う迄もない。

底本：「アンドロギュノスの裔」薔薇十字社
　　１９７０（昭和45）年９月１日初版発行
初出：「新青年」
　　１９２７（昭和２）年10月
入力：森下祐行
校正：もりみつじゅんじ
２０００年２月11日公開
２００７年11月４日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。